

中国語母語話者（北京・上海出身者） による複合動詞の東京語アクセントの 習得

劉 佳琦

要 旨

中国語母語話者による日本語アクセントの習得は、母語の声調体系の影響で困難であることが先行研究で度々指摘されてきた。本研究では、北京・上海方言話者を対象とした生成調査を実施した結果により、東京語アクセント¹の習得における母方言の正負転移の実態が明らかになった。また、母語・母方言に関わらず、アクセントの普遍的特徴が東京語アクセントの習得に与える影響も明らかになった。本研究の結果は、学習者の中間言語音声の実態を把握するには、母語・母方言だけでなく、言語の普遍的特徴も考慮に入れるべきであることを示唆している。最後に、本研究の結果を踏まえて、日本語音声教育の現場におけるアクセント指導について検討した。

キーワード

アクセント 声調 母方言の正負転移 言語の普遍的特徴 中間言語音声

1. はじめに

中国語母語話者を対象に音声指導を行う際に、アクセント（特に複合語アクセント）の習得が困難であると感じたことが多い。また、学習者の出身地によって習得状況が異なることもある。これは偶然なのか、それともアクセント習得における母方言の正負転移なのか実証的研究を行って究明する必要がある。母方言の音韻体系が音声習得に影響する要因であるとするれば、学習者の母方言体系と起こりうる習得の問題点を念頭に音声指導の方法を改善するべきであろう。

今まで中国語母語話者による日本語アクセントの習得研究に関しては、中国の共通語に近い北京方言を母方言とする学習者を対象にしたものが多く見られている。蔡（1983）の中国語母語話者を対象とした複合語アクセントの習得研究では、中国人日本語学習者の場合は、複合語の生成においてピッチの上げ下げが多いことを報告している。しかし、母方言の異なる学習者によるアクセントの習得に関する実証的研究は管見の及ぶ限り見当た

ない。本研究で、アクセントの習得における中国方言の正負転移を究明することに注目し、アクセント規則が比較的単純な複合動詞²を中心に研究することにした。

本研究では、北京・上海方言話者を対象に複合動詞の東京語アクセントの生成調査を行い、母方言の正負転移を考慮したうえで、中国語母語話者による東京語アクセントの習得に影響する要因を明らかにし、日本語音声教育に還元したいと考える。

2. 北京・上海方言の声調と東京語のアクセント

中国大陸では、北方方言区、吳方言区、粵方言区、閩南方言区、湘方言区、客家方言区、贛方言区と呼ばれる7大方言グループに区分されている。本研究で扱う中国方言は、北方方言の北京方言と吳方言の上海方言である。さらに、北京市内と上海市内の方言に限定した。中国語は声調言語として知られているが、方言によっては声調の特徴も異なる。以下、両方言の声調体系について述べる。

表1では、北京・上海方言の声調体系と東京語のアクセント体系を比較している。北京方言の「音節ごとに声調が付与される」という音節声調の特徴に対して、上海方言は「音節ごとに声調が付与されるのではなく、語レベルで一つの変調パターンが実現される」という語声調の特徴を持つことが分かっている（許・湯 1988、早田 1999、游 2004）。また、上海語の連続変調における「語レベルの声調実現」は東京語の語アクセントの単位に類似していると言われている（松本 1986、岩田 2001）。さらに、岩田（2001：25）は、上海方言は「各語声調の違いはピッチの下がり目の有無と位置によって記述できる」という語アクセント特性を持ち、声調言語が語アクセント特性を有するということを指摘した。

表1 北京・上海方言声調と東京語アクセントの比較

北京方言	上海方言（連続変調）	東京語
音節声調	語声調	語アクセント
1) 音節ごとに声調が付与される。 2) 連続変調の場合は、第1音節の声調が語全体に広がることはない。	1) 音節ごとに声調が付与されるのではなく、語レベルで一つの変調パターンが実現される。 2) 連続変調の場合、第1音節の声調が語全体に広がることになる。	語レベルで一つのアクセントが実現される。また、語内で一度下がったピッチは二度と上がらない。

このように母方言が語レベルのアクセント特性を持つ上海方言話者は、東京語アクセントの習得において、音節声調言語を母方言とする北京方言話者より有利ではないかと、王（1991）、野沢・重松（1997）は指摘している。しかし、北京・上海方言の異なる声調体系を考慮し、東京語アクセントの習得に与える影響を実証する研究は管見の及ぶ限り見当たらない。

3. 生成調査

3.1 調査目的

本研究では、北京・上海出身の日本語学習者を対象に生成調査を行い、東京語アクセントの習得に影響する要因を明らかにし、日本語音声教育に還元することを目的とする。

3.2 調査協力者

3.2.1 日本語学習者

本研究の調査協力者は、北京、上海にある5つの大学の日本語学科に在籍する日本語学習者である。いずれも日本語を専攻とする学習者である。日本語の学習期間は調査実施時まで2年である。調査協力者の内訳は北京方言話者18名、上海方言話者21名、計39名である。調査協力者の両親又は保育者ともに北京と上海市内出身であることを原則とした。

3.2.2 日本語母語話者

本研究では、学習者の音声を日本語母語話者に評価の依頼をした。評価者は東京都出身の日本語母語話者5名である。協力者全員が日本語教育経験者であり、日本語音声についての基礎知識を持っている。日本語学習者との接触もあり、学習者の日本語音声を聞き慣れていると考えられる。本研究の評価調査では、「アクセントの自然度」の評価以外に、「アクセント核の位置」の判定及び学習者の音声に対する具体的なコメントも求められているため、音声学の知識や日本語教育経験のない日本人より、学習者の音声に触れる機会が比較的に多く、且つ音声知識を持っている日本語教育経験者のほうが適任であるとの判断をした。また調査後、評価者間における発音評価の相関関係を求めた（本稿 3.5.1 参照）。

3.3 調査対象語

本研究では、6種類の「動詞＋動詞」の5拍複合動詞を調査対象語（以下、「調査語」と呼ぶ）とした（表2）。また、類型3、4、6の複合動詞の場合は、平板式アクセントも原則として存在している³。本研究ではその原則に従い、複合動詞の平板式アクセントも取り入れることにした。

表2 複合動詞の複合類型と調査語の一例

複合類型		調査語の一例
1	0型＋0型→-2型	つむ + あげる → つみあげ ⁴
2	0型＋-2型→-2型	ふむ + やぶ ¹ る → ふみやぶ ¹ る
3	-2型＋0型→-2型/0型	あ ¹ る + ふれる → ありふれ ¹ る / ありふれる
4	-2型＋-2型→-2型/0型	あ ¹ る + あま ¹ る → ありあま ¹ る / ありあまる
5	0型＋-3型→-3型	よぶ + か ¹ えす → よびか ¹ えす
6	-2型＋-3型→-3型/0型	と ¹ る + か ¹ えす → とりか ¹ えす / とりかえす

調査語は、各複合類型につき10語を選定し、計60語である。また、複合類型1～4の40語のうち、重音節⁵の連母音⁶を含む調査語は8語である。複合類型5と6の場合は、すべての調査語に連母音が含まれている。なお、連母音の有無と調査語の既知度⁷がそれぞれアクセントの習得に与える影響についても考察する（本稿3.5.1.1、3.5.1.2参照）。

3.4 調査手順

まず、調査語の番号をEXCELでランダムに並べ替え、調査語表を作成した。次に、パソコン画面に提示された調査語を学習者に連続3回発音してもらい、録音をした。調査時間は20分で、休憩を挟みながら実施した。学習者が3回発音したうちの2回目⁸の音声を取り、再編集した。学習者の日本語アクセントの自然度について、東京語母語話者5名（本稿3.2.2参照）に4段階⁹で評価してもらった。本研究では、録音機はSONY PCM-D1、マイクはSONY ECM-MS957を使用した。音声編集はCoolEdit96を使用した。

各調査語において、東京語母語話者の「自然である」に対する同意度「同意する（4）」、「やや同意する（3）」、「やや同意しない（2）」、「同意しない（1）」の評価数をそれぞれ集計した。また、「同意する（4）」と評価された場合のアクセントを「[正用]アクセントパターン」として評価数を集計した。「同意しない（1）」と評価された場合のアクセントを「[誤用]アクセントパターン」として集計した。さらに、評価数／総評価数で、「同意する」の評価数の割合（以下、「正用率」と呼ぶ）、「正用」・「誤用」アクセントパターンの出現率の平均を割り出し、統計分析ソフトSPSS11.5で統計分析を行った。

3.5 調査結果

本研究では、1) 正用率、2) 「正用」アクセントパターン、3) 「誤用」アクセントパターンの3つに分けて、調査結果を述べる。

3.5.1 複合動詞アクセントの正用率

本調査で6つの複合類型の5拍語複合動詞を調査対象語とした。それぞれの正用率及び北京方言話者と上海方言話者の比較は表3にまとめた。両方言話者の比較では、複合類型1～3（－2型アクセント）（例、「つみあげ1る」）の複合動詞の場合は、北京方言話者

表3 複合動詞アクセントの正用率

複合類型	類型1	類型2	類型3	類型4	類型5	類型6
規則的なアクセント型	－2型		－2型か0型		－3型	－3型か0型
北 京	52.1% (7.0)	61.9% (6.5)	58.6% (7.3)	69.9% (4.5)	76.0% (7.3)	75.2% (10.0)
上 海	70.5% (9.5)	74.7% (3.9)	66.8% (5.2)	75.5% (5.9)	67.6% (12.5)	57.9% (15.0)
北京と上海の比較	北京<上海**	北京<上海**	北京<上海*	有意差なし	北京>上海*	北京>上海*

**有意確率1% *有意確率5% () 標準偏差

より上海方言話者のほうの正用率が高い。複合類型 5 と 6（－3 型アクセント）（例、「よびかゝえす」）の複合動詞の場合は、北京方言話者のほうの正用率が高いことが分かった。しかし、複合類型 4（例、「ありあまゝる」）においては、両方言話者の間に差異が見られなかった。また、評価者の中国滞在歴と年齢の違いを考慮して、評価者間における発音評価の相関係数¹⁰を求めた。その結果、評価者間で発音評価の強い相関（ $r > .7$ ）があることが確認された。したがって、評価者の中国滞在歴や年齢などの個人要因は発音評価に関与しないと考えられる。

3.5.1.1 連母音の有無と正用率の関係

本研究で調査対象とした複合類型 1～4（－2 型アクセント）の複合動詞の場合、アクセント核を担う音節¹¹に連母音を含む調査語（例、「めぐりあう」）と含まない調査語の正用率を分析した。表 4 のように、正用率の平均値から見ると、連母音を含む調査語の正用率が高いことが分かった。統計分析の結果、北京： $t(38) = 3.312$ 、 $P = .037$ 、上海： $t(38) = 1.653$ 、 $P < .005$ で、両方言話者とも有意差が見られた。北京方言話者と上海方言話者に共通して、連母音を含む音節（重音節）にアクセント核を付与する傾向が明らかになった。

表 4 連母音を含む調査語と含まない調査語の正用率

		正用率	標準偏差 (SD)
北京	連母音を含む語	69.4%	15.3
	連母音を含まない語	62.2%	9.8
上海	連母音を含む語	84.0%	18.3
	連母音を含まない語	65.9%	12.6

3.5.1.2 調査語の既知度と正用率の関係

本研究で調査対象語としている調査語は有意味語であるため、協力者に調査語の発音又はアクセントが何らかの形ですでにインプットされている可能性がある。そのため、調査語の既知度が生成の正用率に影響するかどうかを分析する必要がある。両者の間の相関関係が認められれば、調査語を知っているか否かは生成に影響を与える可能性が考えられる。

そこで、生成調査を行ったあと、調査語の既知度をはかるアンケートを実施した。調査語を知っている場合は○、知らない場合は×をつけさせ、すべての調査語について自己申告で答えてもらった。その既知度を集計した後、調査語の正用率との相関関係を求めた。相関係数を求めたところ、北京： $r = .140$ （ $N = 60$ ）、上海： $r = .009$ （ $N = 60$ ）、相関関係が認められなかった。したがって、今回の調査では調査語を知っているか否かはアクセントの生成に影響を与える可能性がないと考えてもよい。

3.5.2 複合動詞の「正用」アクセントパターン

6つの複合類型の「正用」アクセントは、以下表5のとおりである。調査から、以下の結果が得られた。

- 1) 6つの複合類型に共通して、「正用」として評価されたアクセント型は、すべて秋永(2006)、『新明解日本語アクセント辞典』に載っている規則的なアクセント型と一致している。この結果から、本研究の場合は、学習者の発音に対して、規則的なアクセント型しか「正用」として許容できないことが明らかになった。
- 2) 複合類型3(例、「ありふれゝる／ありふれる」)、複合類型4(例、「ありあまゝる／ありあまる」)と複合類型6(例、「とりかゝえす／とりかえす」)の複合動詞の場合は、原則として-2型アクセントも0型アクセントも存在しており、どちらも「自然である」と評価されるはずである。しかし、「正用」パターンとして、-2型の出現率と比べて、0型の出現率が低いことが分かった。表6では、複合動詞の0型平板式アクセントに対しての「正用」の評価数と「誤用」の評価数を比較している。t検定の結果、複合類型3の場合は $t(76) = -3.906, P < .001$ 、複合類型4の場合は $t(76) = -3.807, P < .001$ 、複合類型6の場合は $t(76) = -3.011, P < .001$ 、「正用」評価数の割合と比べて、「誤用」評価数の割合のほうが有意に高いことが分かった。これは北京・上海方言話者の間に差異がなく、共通した特徴である。
- 3) 北京方言話者と上海方言話者の比較では、複合類型4(例、「ありあまゝる」)の場合は、上海方言話者のほうが「正用」パターンである-2型アクセントの生成が多いことが分かった。一方、複合類型5(例、「よびかゝえす」)と複合類型6(例、「とりかゝえす」)の場合は、北京方言話者のほうが「正用」パターンである-3型アクセントの生成が多いことが分かった。

表5 複合動詞の「正用」アクセントパターン

複合類型	類型1	類型2	類型3	類型4	類型5	類型6
規則的なアクセント型	-2型		-2型か0型		-3型	-3型か0型
北京	-2型**	-2型**	-2型**	-2型**	-3型**	-3型**
上海						
北京と上海の比較	有意差なし	有意差なし	有意差なし	-2型** 北京<上海	-3型* 北京>上海	-3型** 北京>上海

**有意確率1% *有意確率5%

表6 複合動詞の0型平板式アクセントの評価

複合類型	「正用」評価数の割合 (SD)	「誤用」評価数の割合 (SD)
類型3	0.2% (0.3)	7.9% (3.6)
類型4	0.0% (-)	4.2% (2.1)
類型6	0.1% (0.2)	2.4% (2.4)

3.5.3 複合動詞の「誤用」アクセントパターン

6つの複合類型の「誤用」アクセントは、以下表7のとおりである。調査から、以下のことが分かった。

- 1) 北京方言話者の場合は、複合類型2と複合類型3の生成において、上げ下げ型¹²（例、「ふみ₁やぶ₁る」、「あり₁ふれ₁る」）が「誤用」として多く見られた。
- 2) 上海方言話者の場合は、複合類型6の生成において、-2型アクセント（例、「とりかえ₁す」）の「誤用」が多く見られた。
- 3) 両方言話者の比較では、複合類型1～4の複合動詞の生成においては、上海方言話者と比べて、北京方言話者のほうが上げ下げ型（例、「つみ₁あげ₁る」）の「誤用」アクセントパターンの出現率が有意に高いことが分かった。
- 4) 両方言話者の「誤用」パターンの出現率の比較では、複合類型1の場合は-2型（例、「つみあげ₁る」）：北京（0.7%）＜上海（2.4%）で、複合類型3の場合は-4型（例、「あり₁ふれる」）：北京（0.2%）＜上海（3.5%）で、複合類型6の場合は0型（例、「とりかえ₁す」）：北京（3.7%）＞上海（1.0%）である。それぞれ両方言話者の間に有意差は見られたものの、ほかの「誤用」パターンと比べて、出現率が低い。

表7 複合動詞の「誤用」アクセントパターン

複合類型	類型1	類型2	類型3	類型4	類型5	類型6
規則的なアクセント型	-2型		-2型か0型		-3型	-3型か0型
北京	—	上げ下げ型**	上げ下げ型**	上げ下げ型**	-2型**	—
上海		—	—			-2型**
北京と上海の比較	上げ下げ型** 北京＞上海	上げ下げ型** 北京＞上海	上げ下げ型** 北京＞上海	上げ下げ型* 北京＞上海	-2型** 北京＜上海	-2型** 北京＜上海
	-2型** 北京＜上海	-2型** 北京＜上海	-4型** 北京＜上海	-4型** 北京＜上海	0型** 北京＞上海	0型** 北京＞上海

**有意確率1% *有意確率5% —：統計的に有意な「誤用」パターンが見られない

4. 考 察

本研究の結果を踏まえた上で、1) 母方言の正負転移、2) アクセントの普遍的特徴の影響の2つの観点から習得現象を考察する。

4.1 母方言の正負転移

Tarone (1987) では、中間言語 (Selinker 1972) を特徴づける要因として母語の正負転移が挙げられている。また、第二言語習得において母語の影響が最も顕著に現れる分野が音声・音韻であるといわれている (戸田 2001)。中国語母語話者による日本語の有声・無声破裂音の習得研究においては、母方言の正負転移が明らかになっている (福岡 1995、劉 2008)。さらに、上海方言と北京方言の声調体系の違いを指摘し、東京語アクセントの

習得にも影響を与える可能性がある」と理論的に論じた研究もある（王 1991、野沢・重松 1997）。しかし、北京・上海方言の異なる声調体系を考慮し、東京語アクセントの習得に与える影響を実証する研究は管見の及ぶ限り見当たらない。

本研究の結果から、複合類型 1～4 の複合動詞のアクセントの生成において、両方言話者の間に差異が見られた。北京方言話者の場合は、「上げ下げ型誤用」が多く見られた。一方、北京方言話者に比べて、上海方言話者の場合は、「上げ下げ型誤用」の出現率が低いことが明らかになった。

母方言である北京方言と上海方言の声調の特徴を考えると、北京方言の「各音節に声調を付与する」という音節言語の声調特徴と異なって、上海方言の声調は「語としての声調は、各音節に声調を付与するのではなく、語全体を一つのまとまりとして生成する」という語アクセント特性を持つ。上海方言話者の場合は、複合動詞を一つのまとまりとしてアクセントを実現している。それに対して、母方言の声調には語アクセント特性を持たない北京方言話者の場合は、各音節にアクセントを付与し、ピッチの上げ下げが顕著に聞こえることが明らかになった。したがって、本研究の複合動詞アクセントの調査結果においては、母方言の声調に語レベルのアクセント特性を持つ上海方言話者の方が北京方言話者より生成しやすいと考えられる。一方、母方言の声調に語アクセント特性を持たない北京方言話者の場合は、「上げ下げ型誤用」パターンを多発し、一つのまとまりとしてのピッチ実現が困難であると言える。

4.2 アクセントの普遍的特徴の影響

言語の表層現象の根底にアクセントの基本的な原理が存在し、言葉を操る能力の一部として人間に生まれつき持っているという考え方がある。それはアクセントの普遍的特徴と呼ぶことができる。近年の言語研究における研究成果から、個別の言語現象や規則を記述するとともに、言語現象を普遍的特性によって記述・説明しようとする動きが注目されるようになった（窪田 2003）。

窪田（2006：48）ではアクセントの普遍的特徴として「軽音節より重音節がアクセントを引きつける」という「重さの原理」が提示されており、人間の言葉の広範囲に観察される一般的な原理であることが分かっている。つまり、一般的には軽音節より重音節にアクセントを付与する傾向があるとされている。また、窪田（2003）は、「マンマ（ママ）」「ネンネ（寝る）」などの幼児語から、日本語を母語とする子供は「重音節＋軽音節」の構造を好むだろうと指摘している。Juseczyk et al.（1993）は、英語を母語とする乳児の場合でも、母語の韻律特徴の獲得において軽音節より重音節に選好反応を示す傾向があると報告している。このように「軽音節より重音節がアクセントを引きつける」という特徴は第一言語の獲得プロセスとして実証されている。さらに、第二言語習得研究において、河津・鮎澤（2003）の台湾人対象の研究、助川（1999）のブラジル人対象の研究、中東（2001）の韓国人（無アクセント方言話者）対象の研究でも、「軽音節より重音節にアクセント核を置く」というアクセント生成の特徴が報告されている。

本研究の調査結果と照らし合わせてみると、北京・上海方言話者に共通して、複合類型 1～4 の複合動詞の場合は、連母音を含む音節（重音節）にアクセント核を付与する傾向

が明らかになった。また、複合類型5と6の-3型複合動詞（例、「よびかゝえす」）には「かえ」のような連母音が含まれている。その場合は、両方言話者に共通して、-3型アクセントパターンが「正用」パターンとして最も出現率が高い。このように、複合動詞の生成において、連母音を含む重音節にアクセント核を置く傾向が明らかになっている。蔡（1983）の中国語話者を対象とした研究でも、重音節にアクセント核を置く傾向があることを報告しているが、その原因は中国語の音節概念にあると母語からの干渉を指摘している。しかし、本研究の考察から、「重音節にアクセント核を置く」のは第一言語、第二言語の習得に共通した特徴であることが分かった。つまり、母語の干渉というよりも、アクセントの普遍的特徴によるものであると解釈したほうが妥当である。

ほかにここで特筆すべき点は、アクセント核を担う音節に連母音が含まれている（例、「めぐりあう」）場合は、たまたま規則的なアクセントパターンと一致しているため、正用率が高いということである。しかし、正用率が高いのはアクセントの普遍的特徴によるもので、習得しているとは言えないのである。つまり、正用率が高いことと習得していることとは、決して因果関係があるわけではない。これは誤用分析研究の枠組みでは見逃してしまいがちな部分である。中間言語音声習得の実態を解明するためには、正用と誤用の両側面から分析を行い、両者の性質及び原因を突き止める必要があることを示唆している。

また、北京方言話者の場合は、-3型アクセントの複合動詞の生成のほうが、-2型複合動詞のような「上げ下げ型誤用」が少なく、一つのまとまりとして生成していることが分かった。そのことから、北京方言話者の場合は、アクセントの普遍的特徴の影響が結果的に母方言の負の転移を抑制していることが示唆されている。したがって、アクセント指導にあたって、アクセントの普遍的特徴による母方言干渉の抑制効果を利用して、一つのまとまりとしてのピッチ実現を提示することが可能であろう（本稿 5.2 参照）。

5. アクセント指導への提言

戸田（2006：90）では、「まず「どの音声項目をどう教えるか」ということから検討するのではなく、「学習者がどのように音声習得していくか」ということを念頭に置き、研究成果を応用してこそ実際の教室活動において最大限の成果を上げる指導の方法論の検討が可能になる」と述べている。そこで、本研究の結果と考察を踏まえた上で、1) 母方言を考慮したアクセント指導、2) アクセントの普遍的特徴の活用、3) アクセント規則の導入と簡素化について音声教育に提言する。

5.1 母方言を考慮したアクセント指導

アクセントの生成調査で、北京方言話者のほうが母方言の負の転移により、アクセントの「上げ下げ型誤用」を多発する傾向が明らかになった。一方、上海方言の正の転移により、ピッチの「上げ下げ型誤用」が北京方言話者より少ないことも分かった。北京方言話者の「上げ下げ型誤用」を改善するために、アクセント核の有無と位置という音韻知識だけの指導ではなく、「日本語のアクセントは北京方言の音節声調と異なり、語レベルのア

クセントである」というアクセントの仕組みを理解させ、一つのまとまりとしてのピッチ生成の指導・練習が必要であることが、本調査の結果から示唆された。以下、図1は具体例を挙げ、日本語の「語レベルのアクセント」を説明している。北京方言では、音節ごとに声調が付与されるのが一般的であり、複合語の場合でも音節本来の声調が維持される。たとえば、北京方言の「交(jiao1) 談(tan2)」は各音節声調がそのまま残っている。それに対して、日本語の場合は「はなしあう」(図1)のように、単語本来のアクセントが一部失われ、複合語としてのアクセントが生成される。そのことを学習者に理解させる必要がある。

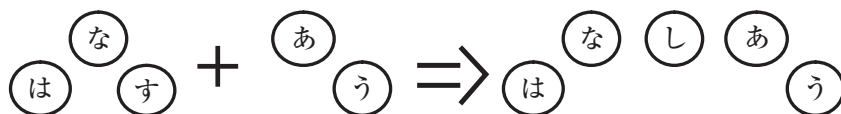


図1 「語レベルのアクセント」の具体例

また教科書の音声解説にも、アクセント核の説明だけでなく、図1のように具体例を挙げ、「語レベルのアクセント」というポイントを抑える必要がある。指導にあたって、北京方言の負の転移による「誤用」の傾向を予め念頭に置き、ピッチの上げ下げの改善に焦点を当てる必要があると思われる。

5.2 アクセントの普遍的特徴の活用

複合動詞の生成において、北京方言話者のほうがピッチの上げ下げが多く見られていることが分かった。一方、調査結果から、アクセントを担う音節に連母音が含まれる複合動詞の場合は、正用率が高く、「上げ下げ型誤用」が少ないことも分かった。これは「アクセント核を重音節に置く傾向がある」というアクセントの普遍的特徴の影響によるものである。そして、アクセントの普遍的特徴の影響が結果的に母方言の負の転移を抑制していることが判明された。したがって、個別指導や発音授業の際、複合動詞を一つのまとまりとして生成する指導において、連母音が含まれる語彙を提示しておけば、高低感覚、一つのまとまりとしてのピッチ実現がつかみやすいと考えられる。表8では、連母音が含まれる複合動詞の練習語彙例を提示している。アクセントを指導する際には、先に提示し、練習しておくとう効果的であろう。

表8 連母音が含まれる複合動詞の練習語彙例

	練習語彙例
－2型 複合動詞	であう、しりあう、つりあう、つきあう、はなしあう、みまう、にかよう、 みならう、みはからう、すれちがう、くいちがう、とりあつかう
－3型 複合動詞	おりかえす、てりかえす、くりかえす、ひきかえす、ふりかえる、 やりとおす、すきとおる

『日本語能力試験出題基準改訂版』(2002)(1～4級語彙リスト)を参考に作成した。

下線：連母音部分

5.3 アクセント規則の導入と簡素化

Pennington (1998) は、音声指導は何らかの発音能力の向上をもたらすと述べている。特に、音声の習得が子供より難しいと考えられている成人にとっては、明示的な音声指導が有効であることを指摘している。磯村 (1996) では、外国人日本語学習者が日本語の韻律を習得するためには、韻律に関する理論的な知識を得て、目標言語の音声を明確に意識化することが有益であると述べられている。つまり、教室内で音声知識を明示的に指導することによって、意識を向けさせ、実際の発音の向上に効果的であると考えられる。

アクセントは恣意的で、語ごとに異なるものであり、個別に記憶力勝負で覚えるしかないと考えられがちであるが、動詞のように一部には、規則を覚えれば、初出語であっても核の有無及び位置が予測できる語群もある (松崎・河野 2005)。したがって、複合動詞アクセントについての知識や規則を適宜に導入することが必要であり、アクセントの意識化が促され、発音の上達に効果的であることが言える。

本研究で取り上げた「動詞+動詞」の複合動詞アクセントは規則的である。原則として表2のように、-2型 (例、「つみあげ1る」)、-2型か0型 (例、「ありふれ1る」か「ありふれる」)、-3型 (例、「よびか1えす」)、-3型か0型 (例、「とりか1えす」か「とりかえす」) の四種類がある。しかし、本稿3.5.2の0型平板式アクセントに対する東京語母語話者の評価に基づいての分析 (表6) では、「正用」評価数より「誤用」評価数のほうが有意に多いことが分かった。つまり、本研究の評価者の場合は、複合動詞の0型アクセントを「正用」より「誤用」と評価していることが明らかになった。川上 (2006: 76) では複合動詞アクセントのゆれについて、「平板式から-2型の起伏式へ変化しつつある」と述べている。特に、中年層・若年層の人々は起伏式に発音する傾向が強いことが分かっている (秋永 2006: 54)。したがって、アクセント規則の導入においても、従来の四種類ではなく、複合動詞のアクセントは「-2型」 (本研究では類型1~4) と「-3型」 (本研究では類型5、6) の二種類であることを規則として導入しても差し支えないと言える。それにより複合動詞のアクセント規則は四種類から二種類に簡素化され、学習者にとって覚えやすいはずである。

以上では、本研究の結果と考察を踏まえた上で音声教育に提言した。なお、今回はアクセント指導法に関する体系的な調査を研究対象外としている。今後、調査協力者の人数を増やして検証することによって、指導法の有効性がより明確になるであろう。

6. まとめと今後の課題

本研究では、北京・上海出身の日本語学習者を対象に生成調査を行い、東京語アクセントの習得に影響する要因を明らかにした。

1) 母方言の正負転移

本研究では、北京・上海方言話者を対象とした生成調査を実施した結果、複合動詞の東京語アクセントの習得における母方言の正負転移の実態が明らかになった。中国語母語話者による日本語アクセントの生成は、母語の声調体系の影響でピッチの上げ下げが多く、

習得が困難であることが先行研究で度々指摘されてきた（蔡 1983、楊 1993、橋本 1995）。しかし、中国語母語話者間にも方言差によって東京語アクセントの習得に差異が生じることが本研究で明らかになった。ピッチの上げ下げが多いのは北京方言話者のみで、上海方言話者においてはこのような傾向が非常に少なかった。

2) アクセントの普遍的特徴

本研究では、複合動詞の生成において、連母音を含む重音節にアクセント核を置く傾向が明らかになった。蔡（1983）の中国語話者を対象とした研究でも、重音節にアクセント核を置く傾向があることを報告している。その原因は中国語の音節概念の影響であると母語からの干渉を指摘している。しかし、異なる言語背景を持つ学習者の場合でも同様なアクセント生成の特徴が観察されている。つまり、これは母語からの干渉というよりも、アクセントの普遍的特徴からの影響であると解釈したほうが妥当であると考えられる。

以上の結果は、日本語音声習得研究において、日本語学習者の方言差及び言語の普遍的特徴を考慮する必要があることを示唆している。

また、本研究の結果を踏まえて、1) 母方言を考慮したアクセントの指導、2) アクセントの普遍的特徴の活用、3) 複合動詞のアクセント規則の導入と簡素化について述べた。

本研究では、「動詞＋動詞」の複合動詞アクセントの習得について言及した。複合名詞（例、「外国人留学生」）や「赤い鉛筆」のような形容詞＋名詞の構造などのアクセント習得にも、母方言の正負転移が予想されるが、どのように転移されるかについては、さらに研究する必要がある。また、中国方言が日本語音声習得に影響する実態をより明確にするために、今後北京・上海方言話者以外の方言話者も研究対象とするべきである。さらに、本研究の結果を踏まえてアクセント指導への提言をした。今後、アクセント教育に関する実証的研究を行い、本研究で提言した指導法の有効性を検証したい。

注

- 1 アクセントに関しては、「東京語」と「標準語」は非常に類似していて、同様であると見なしてもいいと言える（川上 2005）。本研究では、「東京語」という用語を使用する。
- 2 秋永（2006）『新明解日本語アクセント辞典 東京語アクセントの法則』第45項目「動詞＋動詞の結合動詞」に準ずる。
- 3 秋永（2006：54）には、「複合動詞の場合は、前部が起伏式動詞ならば、原則として、平板型である。」との記述がある。
- 4 語中の「1」はアクセント記号であり、アクセント核の位置を示している。
- 5 窪田（1999）によれば、特殊拍（CVM）と連母音（CVV）を含む音節はほかの音節（CV）に比べて重いので、「重音節」と呼ぶことができる。
- 6 「連母音」とは、二つ以上の母音が前後に直接対等に並んで接したものである（日本音声学会 1976）。
- 7 本研究では、「既知度」とは調査語を知っているか否かを指している。
- 8 2回目の発音を採取したのは、1回目と3回目より音声が比較的安定しているからである。
- 9 「アクセントが自然である」に対する同意度を4段階から選択してもらった。1：同意しない、2：やや同意しない、3：やや同意する、4：同意する。
- 10 相関係数 r については、以下のように規定をする。① $.0 \leq r \leq .4$ or $-.4 \leq r \leq 0 \Rightarrow$ 相関なし、② $.4 \leq r \leq .7$ or $-.7 \leq r \leq -.4 \Rightarrow$ 相関あり、③ $.7 \leq r \leq 1.0$ or $-1.0 \leq r \leq -.7 \Rightarrow$ 強い相関あり。

- 11 窪蘭（2006）によれば、アクセントを担う単位がモーラではなく音節（シラブル）であると考えることができる。
- 12 本調査の「上げ下げ型」アクセントパターンは、「一つの単語の中で、2 拍目で下がってまた再び上がって、また4 拍目で下がる」のパターンのみである。これは、調査語の構成が「2 拍 + 3 拍」と「3 拍 + 2 拍」で、形態素境界においてピッチ変動が最も起こりやすいのが原因ではないかと考えられる。

参考文献

- 秋永一枝（2006）『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 磯村一弘（1996）「アクセント型の意識化が外国人日本語学習者の韻律に与える影響」『日本語国際センター紀要』第6号 pp. 1-18
- 岩田礼（2001）「中国語の声調とアクセント」『音声研究』第5巻第1号 pp. 18-27
- 王崇梁（1991）「中国語の方言 上海語」『日本語音声の韻律的特徴と日本語教育—シンポジウム報告—』（重点領域研究「日本語音声」D1 班平成3年度報告書） pp. 81-85
- 川上泰（2005）『日本語アクセント論集』第3版 汲古書院
- （2006）「最近の首都圏語のアクセント変化」『音声研究』第10巻第2号 pp. 72-76
- 河津基・鮎澤孝子（2003）「北京語母語話者による東京語アクセントの聴取テスト結果の横断的・縦断的分析」『第12回小出記念日本語教育研究会予稿集』 pp. 48-53
- 窪蘭晴夫（1999）『日本語の音声』岩波書店
- （2003）「音韻の獲得と言語の普遍性」『音声研究』第7巻第2号 pp. 5-17
- （2006）『アクセントの法則』岩波書店
- 国際交流基金（2002）『日本語能力試験出題基準改訂版』凡人社
- 蔡全勝（1983）「中国人に見られる日本語アクセントの傾向」『在中華人民共和国日本語研修センター紀要 日本語教育研究論纂』第1号 pp. 26-31
- 助川泰彦（1999）「ブラジル人日本語学習者の2モーラ語と3モーラ語のピッチ実現」『音声研究』第3巻第3号 pp. 13-25
- 戸田貴子（2001）「日本語音声習得研究の展望」『第二言語としての日本語の習得研究』第4号 pp. 150-169
- （2006）「音声教育研究の歴史と展望」『早稲田大学日本語教育の歴史と展望』早稲田大学大学院日本語教育研究科編 pp. 76-99
- 中東靖恵（2001）「単語読み上げにおける韓国人日本語学習者のピッチ実現」『日本語教育』第109号 pp. 80-89
- 日本音声学会（1976）『音声学大辞典』三修社
- 野沢素子・重松淳（1997）「中国語話者の日本語学習における音声の問題について—北京語・上海語のイントネーションをめぐる—」『日本語と日本語教育』第25号 pp. 27-52
- 橋本慎吾（1995）「平板アクセントの実現—中国語話者の場合—」『音声言語』V pp. 61-76
- 早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』大修館書店
- 福岡昌子（1995）「北京語・上海語を母語とする日本語学習者の有声・無声破裂音の横断的及び縦断的習得研究」『日本語教育』第87号 pp. 40-53
- 松崎寛・河野俊之（2005）「アクセントの体系的教育を目的とした音声評価研究」『日本語教育』第125号 pp. 57-66
- 松本丁俊（1986）『中国語音声学概論』白帝社
- 楊立明（1993）「中国語話者の日本語述部の韻律に見られる母語の干渉」『文部省重点領域研究 日本語音声と日本語教育—平成4年度研究成果報告書』 pp. 103-122
- 劉佳琦（2008）「中国語母語話者における日本語の有声・無声破裂音の混同—母方言干渉を考慮した上で—」『日本語教育と音声』（戸田貴子編著） pp. 141-162

- Jusczyk, P. W., Cutler, A. and N. Redanz (1993) Preference for the predominant stress pattern of English words. *Child Development* 64 pp. 675-687
- Pennington, M. C. (1998) The teachability of phonology in adulthood: a reexamination. *International Review of Applied Linguistics* 36-4 pp. 323-341
- Selinker, L. (1972) Interlanguage, *International Review of Applied Linguistics* 10 pp. 209-231
- Tarone, E. (1987) The Phonology of interlanguage, *Interlanguage Phonology* in Ioup, G. & Weinberger, S. H. (eds.) pp. 70-85
- 许宝华・汤珍珠 (1988) 『上海市方言志』上海教育出版社
- 游汝杰 (2004) 『汉语方言学教程』上海教育出版社